超大型台風第十四号が、日本各地に被害をもたらしました。こちらは心配した割にはさほど大きな被害もなく、安堵しているところです。あとひと月となった住職継職法要の準備に追われていますが、そういう慌ただしく過ごしている毎日の中でも、仏さまの光明のお照らしは絶え間なくわが身に注がれています。

　前住職（義父）の葬儀のとき、前住職の生い立ちを写真でたどるリーフレットを作成しました。それが好評だったので、この度の継職法要でも、常照さんが住職を拝命したときからの長仁寺の歩みを写真でたどるリーフレットを作成しようと常照さんから提案がありました。さっそくこれまで撮ってあった写真を取り出し、奈津美さんが作業にとりかかってくれました。膨大な写真の量です。どれも捨てがたい思い出の一枚ですから、その中から選りすぐりを選ぶのはなかなか骨が折れます。後から後から、いい写真が出てくるので、何回も変更しますが、奈津美さんは嫌な顔をせず、笑顔で対応してくれました。ほぼ出来上がり、印刷することになった段階で、業者に依頼することにしました。副住職の中学からの同級生松田君が印刷の仕事をしていることに気づき、彼に相談すると気軽に引き受けてくれました。その上、この度の継職法要を知って、二才になる一人娘をお稚児さんに参加させると申し出てくれました。印刷の費用も、「江本の新しい門出を祝うため」と言ってほぼ実費に抑えてくれました。そのリーフレットはご案内といっしょに、間もなく皆様のお手元に届けさせて頂きます。

　私は法中をお迎えする庫裏の片づけをはじめました。引出しを整理していたら、探していた手紙が見つかりました。それは大石先生から頂いた手紙です。大石先生から頂いた手紙は、特別の箱に仕舞ってあるのですが、そのお手紙は特に何度も出して、人にも読んでもらったりしたので、いつのまにか行方知れずとなり探していたのです。平成十八年十二月二十八日に差し出されたお手紙です。息子から思いもかけない仕打ちを受け、どう受け止めればいいのか先生にお手紙を書きました。先生が二男に「智慧ちゃんのことは道人君にまかせる」などとおっしゃった直後でしたから、私はある意味、先生に抗議するような気持ちもあり、問い詰めるような手紙を書いたのです。その手紙に対するお返事です。

　前文略・・・・・

　歎異抄の後序に「聖人のつねの仰せには「弥陀五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人が為なりけり」とあります。長仁寺の寺族の誰か一人、このお言葉を頂かれたら解決です。しかしそれには聖人様が、「親鸞一人」をどのように頂いておられるか。「さればそくばくの業をもちける身にてありけるを助けんと思召したちける本願のかたじけなさよ」と、ひとえに、ご本願をおしいただいておられます。

　自力を出したらすべて「・・・曠劫を遍歴せん」と聖人様が申しておられます。私自身、長い間

迷うてきました。

　平成十八年　十二月　二十八日

江本法喜様　　　　　　　　　　　　　　大石法夫

　「親鸞一人」の横に丸印が付けてありました。

言い訳らしいことは一切なく、自力を出したら迷うだけだときびしく突き放しておられます。

しかし、当時の私はお手紙を読んでも、お心を頂くことはできないままでした。私は仏さまの救いということが何もわかっていなかったのです。業に縛られ、仏さまの救いに気がつかず、思い通りにならない苛立ちを外に向けていたのでした。根深い我への執着です。八月の末、平成十九年の京都中村万助商店での御法座の記録を久しぶりに拝読する機会を頂きました。それは私が自らテープ起こしさせていただいた、オウムの死刑囚井上嘉浩氏の御両親を前にされての御法座の記録です。本願念仏の救いについて先生が渾身の御法話をされています。その場に居ながら、その時もやはりよくは分かっていなかったのですが、時至りようやくそうだったのかと、目から鱗が落ちる思いで読み返しました。私は何にも聞こえていなかったのです。すると先生のお言葉が思い出されました。この度の第十四号の掲示板に書かせていただきました。平成六年の年賀状に書かれた文言です。お言葉の世界は自力では頂けない世界です。教えはすべてそうです。頂くばかりです。　　　　　　　　　　　　　合掌

南無阿弥陀仏　　　　　　　　　　　　　　　　　　法喜